

(1) 竣功近き萬年山青松寺全景

-----  
**鐵 骨 混 凝 土 の モ ダ ン 寺 院**  
 -----

## 萬 年 山 青 松 寺 再 建 工 事 記 要

### 設 計 概 要

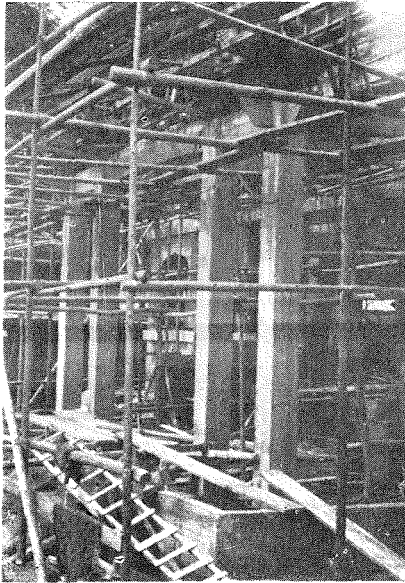
位置 東京市芝區愛宕町一丁目二十七番地。  
 構造 鐵骨鐵筋コンクリート二軒(ふたのき)造地  
 下室付、屋根入母屋妻飾組物付。  
 様式 和風佛殿式  
 規模

面積	御本堂床	183.775坪
	地下室	208.302坪
	合計	392.077坪
建地軒高	御本堂敷地々磬面より萱負下端 外角迄	25.265尺
軒高	御本堂敷地々磬面より棟瓦上端まで	61.85尺
床高	御本堂床敷地々磬面より壘上端まで	7.50尺
土間	同上より土間敷上端迄	6.20尺

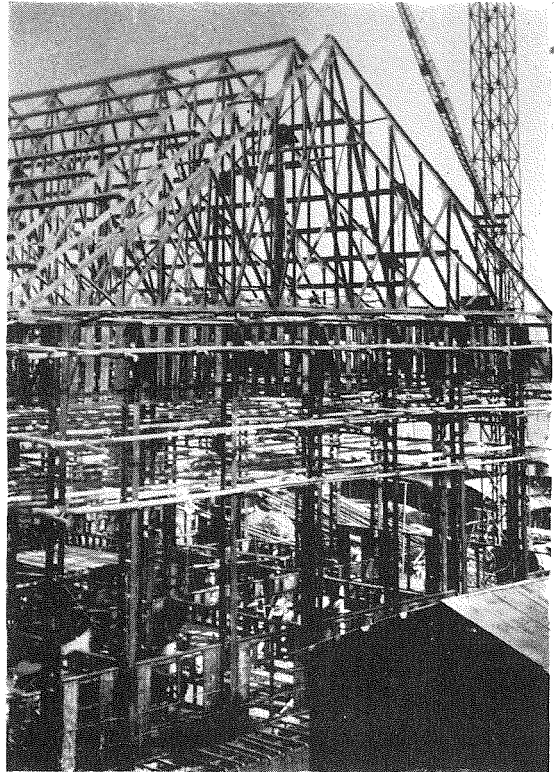
地下室床 同上より床仕上面迄  
3.50尺  
 階高 地下室床面より本堂壘上端迄  
10.50尺

### 施 工 概 要

基礎 割票、鐵筋コンクリート造、ベタ地形  
 屋根 (御本堂)鐵母屋上にハイリブメタルラス張  
 コンクリート打、本瓦葺  
 後堂及階段室 鐵筋コンクリート打の上にアスベ  
 ストモルタル塗の上銅板張。  
 壁 内陣一部及將來大書院増築の際取毀つべき箇  
 所は木造ラス張モルタル塗。  
 外部仕上 下塗モルタル、中塗防水性アスベスタ  
 スモルタル(仕上色と同色素を混入せるもの)  
 塗、  
 内部仕上 御本堂及後堂プラスター塗、腰プラッ  
 トウォールペイント又はプラットトーン 2回



(2) 工事中の青松寺向拜



(3) 右は鐵骨組立を了つた青松寺本堂

塗仕上。  
 天井 仕上 本堂廻椽、格椽、小組、天井板共台湾檜製白ラツク塗。  
 床 鐵筋コンクリート上に杉板張、墨敷一部台湾檜拭板張「ラツクス」塗(本堂)  
 柱及組物 來迎柱は木骨鐵筋ラス張モルタル塗、但し鐵筋コンクリートはラス張モルタル塗。  
 外部仕上 壁外部仕上に同じ。  
 内部仕上 プラスター塗、一部石膏型張付上漆塗仕上とす。柱下部床上 6尺通は寒冷紗張の上漆塗仕上とす。其他壁内部仕上に同じ。  
 軒 主體鐵骨ラス張モルタル塗仕上はプラスター塗 但隅木及椽銅板張張燻塗物を付けたるものとす。  
 基壇 外部仕上は側花崗石張、上端向拜同石敷、周圍人造石洗ひ出し、四半目地入れ、採光ブリズムガラス嵌入。  
 階段 向拜正面 花崗石。  
 本堂正面 同上水磨き  
 水磬 萬成石水磨き。  
 帶附工事  
 下水 (石造)、地下室床排水溜、地下室外部排水管5寸土管)  
 總工費 約25萬圓  
 請負人 伊藤平左衛門氏。  
 設計者 三輪幸左衛門氏。

工事監督 池田正巳氏。小磯鶴吉氏。

### 江戸三刹の一

青松寺は文明八年、江戸城主太田道灌が舜徳禪師に請して開山とし、創立せられ、當時の所在は麴町貝塚の境即ち現今の平河町、それを徳川家康が江戸築城に際し、家康自ら現在地に相し、用材を寄進して建立せられ二十餘石の朱印を附して『江戸三刹の一』に列せられた、これ慶長五年當山八世伊天和尙の時であつた。

そして後には淺野、毛利、山内の三國主を初め十八諸侯の香華院となり、檀越の接化と宗門學徒の教育に盡粹して來た。

山主杉村哲夫氏は奥州秋田縣の人、今から二十有餘年前、雲水として錫を當山に掛け元峰禪師並に先師和尙に就て修行、その間東洋大學を卒業。地方に雲遊漂浪、時々歸山しては先師の補佐をしてゐたが先師は、昭和二年二月病のため隠退せらるるや、推されてその後を嗣いだ。時に年は俗界では『不惑』にも未滿、年齢を超越した佛界とは云へ、その壯年を以てしてこの大刹の山主となつた氏、固より達眼徹識極行の師である。傳統に因襲の凝固が常套の斯界にあつて、よく時代に明敏な所、本建築が示す寺院建築史上のエポック、に見る躍如たる氏の面目ではある。かうした師によつて説かれる佛教こそは、蓋し現時代に生きた宗教であり、將來佛教の革進を約束し得るものであらう。